「地元のものを選ぶことが地域経済を支える」 枝廣淳子氏が講演

地域内経済循環の重要性を説く枝廣淳子氏（大学院大学至善館副学長・教授／株式会社未来創造部代表取締役）がこのほど、しまね地産地消キャンペーンの開始を記念し、「地域経済を創りなおす」と題して松江市内で講演しました。枝廣氏は「地元のものを選ぶことが地域経済を支える力になる」と強調しました。講演要旨をお伝えします。

「漏れバケツ」をふさごう

地産地消と地域内経済循環は地域の未来を左右する大事な仕組みです。観光や企業誘致で外からお金を呼び込むことも大事ですが、入ってきたお金が外へ流れ出してしまえば、地域は豊かになりません。私は「漏れバケツ」という例えを使います。穴だらけのバケツに水を入れても、すぐに漏れてしまいますよね。地域経済も同じです。まずは、その穴をふさぐこと。つまり、地域に入ったお金を地域の中でぐるぐる回す仕組みをつくることが大事なんです。

地産地消は地域経済戦略

地産地消は、地域の経済を強くするための戦略です。効果は3つあります。1つ目は経済的効果。地域内でお金が回れば、雇用や所得が地域に還元されます。2つ目は環境的効果。輸送距離が短くなることで CO_2排出が減ります。3つ目は社会的効果。生産者と消費者のつながりが強まり、地域コミュニティが活性化します。「地産地消は、地域の未来を形づくる行動」なのです。

畜産業の「漏れ」をふさぐ

島根県海士町では、地域内経済循環を高めるために「お金の漏れ」を見える化しました。すると、畜産業で大きな漏れがあることが分かったんです。子牛を外から買ってきて育てていたので、外部への支払いが多かった。そこで、町内で子牛を生産する仕組みをつくりました。結果、地域内でお金が回るようになり、畜産業の利益も上がりました。

海士町では「おすそわけ文化」が地域を支えています。家庭菜園の野菜を近所に分ける。餅をついたら届ける。こうしたやり取りは、単なる食べ物の交換ではなく、人と人の信頼をつなぐ仕組みです。移住者もこのネットワークに入ることで孤立しない。地域のレジリエンス（困難や逆境を跳ね返す力）を高める大事な要素です。

学校給食の力と可能性

学校給食に関わる取り組みは、地域経済を動かす大きな力になります。参考になるのが、富山県の事例です。給食に地元食材を導入する取り組みを３段階で進めています。

第1段階が、地元食材の一部導入。米や野菜など、調達しやすい品目からスタートし、地元農家との関係づくりが始まります。第2段階が生産者との連携強化。学校給食センターと農家が直接話し合い、必要な量や時期を調整し、生産者が学校に訪問し、子どもたちと一緒に食べる機会をつくります。子どもが家庭で話題にし、保護者の購買意識が変わり、地元消費が広がる。そして、第３段階が、品目を増やし、地域経済を潤すこと。「給食でこの野菜を出したい」という要望が農家に届くと、「じゃあ頑張って作るか」と新しい品目に挑戦するようになる。その結果、生産者の売上増や、地域内取引が拡大することで経済循環強化、給食の栄養バランス改善などに波及していきます。

給食の要望が、農家の新しい挑戦を生み、地域経済を動かす。これは確実に地域内循環を増やす効果があります。

地域支援型農業の仕組み

イギリスのトットネスという町では、「トットネスポンド」という地域通貨を導入しました。地域で使えるお金をつくって、地域内でお金を回す仕組みです。さらに、CSA（地域支援型農業）という仕組みも広がっています。消費者が農家に前払いして、収穫物を分けてもらう。リスクも分かち合う。こうした仕組みは、地域経済を強くするだけでなく、安心感や信頼を生みます。「誰かが作ってくれるから食べられる」「困ったときに助け合える」。これが地域の力です。

「10回に1回」が大差生む

食材などすべてを地元で買うのは難しいですよね。でも、10回に1回、地元で買うだけでも大きな違いが生まれます。例えば、1万円の支出のうち8割が地域外に流出する町と、8割が地域内に残る町では、最終的な経済効果に5倍の差が出ます。お金が何回も回ることで、地域に富が生まれるんです。

皆さんにお願いしたいのは、今日からできる小さな一歩です。地元で買う、地元のものを選ぶ。それだけで地域経済を支える力になります。10回に1回でいいんです。「今日は地元の野菜を買おう」「今日は地元のお店で食べよう」。その積み重ねが地域を変えます。

次世代にこの考え方を伝えることも大切です。学校給食や地域活動を通じて、子どもたちに「地域で生きる意味」を体験させること。生産者と一緒に食べる、話す、そういう機会を増やすことで、地域への愛着が育ちます。

地域内経済循環の重要性を説く枝廣氏

「漏れバケツ」理論などについて学ぶ参加者